



Discussion Paper No.208

江戸期までの綱引き風俗図誌の集成と考察

櫻井 龍彦

March 2018

Graduate School
of
International Development

NAGOYA UNIVERSITY
NAGOYA 464-8601, JAPAN

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院国際開発研究科

江戸期までの綱引き風俗図誌の集成と考察

櫻井龍彦

はじめに

日本列島には北は北海道アイヌの人びとから南は沖縄・八重山にいたるまで各地に綱引き行事が伝承されている。由来、時期、目的、場所、綱を縫う作業過程や技術、参加者などは各地域によってそれぞれ異なり特徴がある。

起源もよくわかつていない。中国や朝鮮半島から稻作とともに伝來した可能性は高いが、綱はワラを材料とするとは限らず、大木や枝、萱、葛、藤蔓、竹などもあり、山の神信仰や龍神信仰と関係した綱引きもある。神社に奉納する神事の一つとして行われる事例が多いが、盆綱のように仏教との縁もあり、山神・田神、水神、産土神、祖靈信仰など神仏への関わりが深い。

綱引きは年中行事の一つなので、時節の中において意義が異なってくる。その多様性は、日本文化の起源や神観念、祖靈觀念といった根源的な問題ばかりではなく、村落の組織形態や祭礼の空間的構造などを探求する上でも大きなヒントを与えてくれるものである。

綱の形や競技の様子がどのようなものであったか、それを文字で描写してもなかなかイメージが結ばれないものだが、幸いわが国には、目で確かめることができる絵画史料が残っている。本稿は江戸末期までのさまざまなジャンルの文献に挿入された絵図のなかから、綱引きの光景があるものを集め、それが今日も伝承されていれば、筆者の撮影した写真などと対照し、簡単な考察を加えたものである。

利用した史料は大部分は江戸期のものである。屏風や襖に描かれた風景画、児童の遊びを主とした絵本、年中行事を略説した歳時記の挿画、各地を巡遊して見聞を記録した紀行文などのほかに、特に江戸時代後期になると、多く出版された諸国の名所図会である。景勝地や神社仏閣などを文字解説と絵画で紹介した地誌として利用価値は高い。

なお本文中「綱引き」は「綱曳き」、「綱挽き」などとも表現しているが、それは文献での表記と現地での使われ方に従つたものである。

1. 子どもの綱引き

1-1. 上杉本『洛中洛外図屏風』

上杉本『洛中洛外図屏風』には、子どもが綱引きに興ずる場面が描かれている。六曲一双の屏風には四季折々の風物や行事が描かれていて、綱引きは左隻第二扇にあり、季節は正月である。

図1 洛中洛外図屏風のなかの綱引き



上杉本は天正2年（1574）に織田信長が上杉謙信に贈ったもので、狩野永徳の筆になるというのが通説である（黒田 1996）。描かれている景観は16世紀の半ばごろのもので、室町時代には平安京のような都会でも綱引きがおこなわれていたことがわかる。

場所は室町通り天心院（旧細川正元宅）あたり。軒先に正月飾りの裏白が垂れ、通りには千秋萬歳、春駒などの門付け芸人が町屋を訪れ、京童が羽子突きや振々毬打で遊ぶ姿がみえる。そのなかに子どもの綱引きがある。細いわら縄を5人対4人で引きあっている。歳のはじめの綱引きは、一般には農耕儀礼として年占の意義をもち、集団による対抗試合のかたちをとるが、ごく少人数の子どもだけによる綱引きは、単なる正月の遊戯となっているのであろう。

林屋辰三郎は春駒もここでは門付け芸人ではなく、子どもがその真似をして遊んでいる情景と解釈している（林屋 1985：12、14）。馬の頭の形をしたものを持つ竹の先につけ、それにまたがっている姿なので、門付け芸人が祝言をしに廻っているのではなく、子どもの春駒遊びなのであろう。同じように、この時代すでに綱引きも農村での豊凶を占う祭事的な意味とは別に、都会では遊戯に転化しているといえるかもしれない。

安土桃山・江戸前期の俳人である松永貞徳（1571～1654）の『貞徳狂歌集』上に、「正月 子どものつな引きしてあそびけるを、やうすよき女の、子をうしろにおゐて見物しけり、子どもこれを見て、つなにていわひ申さんといへば、そ

のまゝ家にかへりぬるを、柳を題にして歌よみにける」という記事がある。綱引きがこの時代に子どもの遊戯となっていたことが明らかである（岡見・佐竹 1983：141）。

1-2. 名古屋城本丸御殿対面所の障壁画

本丸御殿の対面所は、慶長 17 年(1612)に着工し、元和元年(1615)に完成した殿舎で、襖絵は狩野貞信を中心とした狩野派の画家によって制作された。対面所次之間にある襖は、初代藩主徳川義直の正室である春姫の故郷和歌山の情景が描かれているとされる。17世紀の初め、地方の町の通りでも子どもの綱引きが見られたことがわかる。季節はおそらく正月であろう。

図 2 名古屋城本丸御殿対面所障壁画のなかの綱引き



図 3 綱引き部分の拡大図



黒川道祐編『日次紀事』は江戸前期の京都を中心とする年中行事を集大成したもので（ただし挿画はない）、延宝4年（1676）の林鷺峰の序がついている。この書物から江戸初期に見られた朝野公私の年中行事を確認できるが、そこに正月の行事として、次のようにある。

凡自元日農工商各般樂、…男児擊毬杖玩弓矢、女子動羽子木板弄糸毬、又児童引大綱於街頭而遮女人之往来、是綱十五日朝与爆竹燒之。

（野間光辰編 1968：76）

洛中洛外図も名古屋城本丸御殿の襖絵も、子どもは街頭で綱引きをして遊んでいるが、女人の往来をさまたげるというからかいもあったのか。先に引いた『貞徳狂歌集』に、「やうすよき女の、子をうしろにおゐて見物しけり、子どもこれを見て、つなにていわひ申さんといへば、そのまゝ家にかへりぬる」というのも、女人へのからかいを意味しているのかもしれない。

なお『日次紀事』の子どもの綱が「大綱」となっているのが気にかかる。絵で見る限りは大綱ではない。また十五日に爆竹などとともに焼却するというのは、いわゆる左義長・どんど焼きのことで、ワラ綱を門松や注連縄などとともに焼き、歳神をおくる習俗である。あとで引用する大津市長等神社の綱打ち神事に使ったワラ綱は小正月が終わった翌16日に焼いているように、今日でも左義長にあわせて綱引きの綱を焼くところがある。この伝統は江戸前期までは遡れることが確認できることになる。

1-3. 「絵本」のなかの遊戯

江戸時代の子どもの遊びを紹介する「絵本」には、遊戯としての綱引きが描かれている。

図4 絵本のなかの子ども綱引き

上：万亭応賀『幼稚遊昔雛形』、下：西川祐信『絵本大和童』

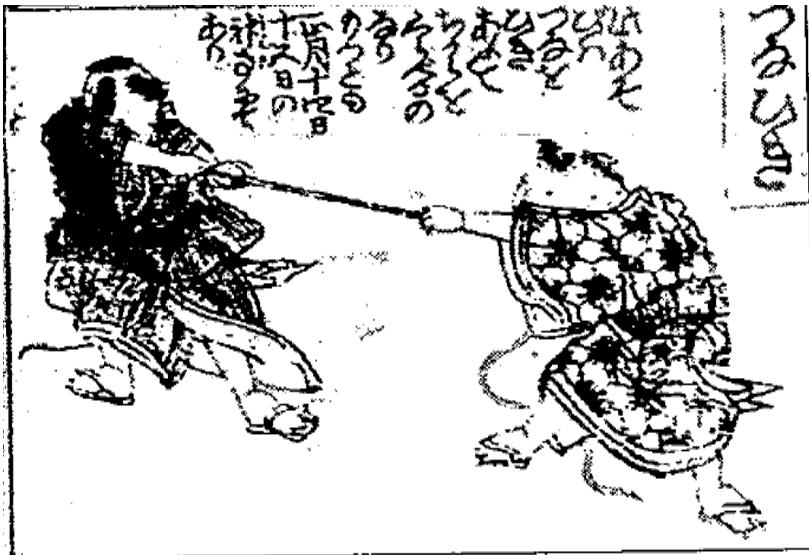


図4下に示した西川祐信『絵本大和童』には、7月の盆灯籠が飾られた家の前で、男の子による一対一の綱引きが描かれている。盆に引く「盆綱」は今日でも北関東や北九州などに見られるが（櫻井 2012a、2012b）、先祖供養とかかわるような宗教的意義がこの子ども2人による綱引きに内在しているのかどうかはわからない。大人の盆綱をまねた子どもの遊びと考えるのがよいのではないか。画家の西川祐信の生卒は1670～1751年なので、江戸中期のころには盆に引く綱があったことがわかる。

万亭応賀著、静斎英一画『幼稚遊昔雛形』中巻は天保15年（1844）に刊行された。江戸時代の後期になるが、ここにも男児2人による綱引きがある（図4上）。解説がついていて、「此のあそびは、つなをひきあふて、ちからをくらべるのなり。もつとも正月十四日十五日の神事にてあり。」という。もとは小正月

の神事であったものが遊戯に転化したことを認識していた記述である。

1-4. 年中行事から

江戸後期の子ども綱引きを伝える文献をもう一つあげておく。

京都の浮世絵師である速水春暁斎著、森川保之画、天保3年（1832）刊『諸国年中行事（大日本年中行事大全）』（注1）巻1の正月十三日に、

（近）大津上手綱うち 江州滋賀郡にあり。大綱を引合ひて戯とす十六日まで。
とある。（水谷、宮尾 1981：31）

さきに引用した江戸初期の『日次紀事』には、十三日綱引きのところに

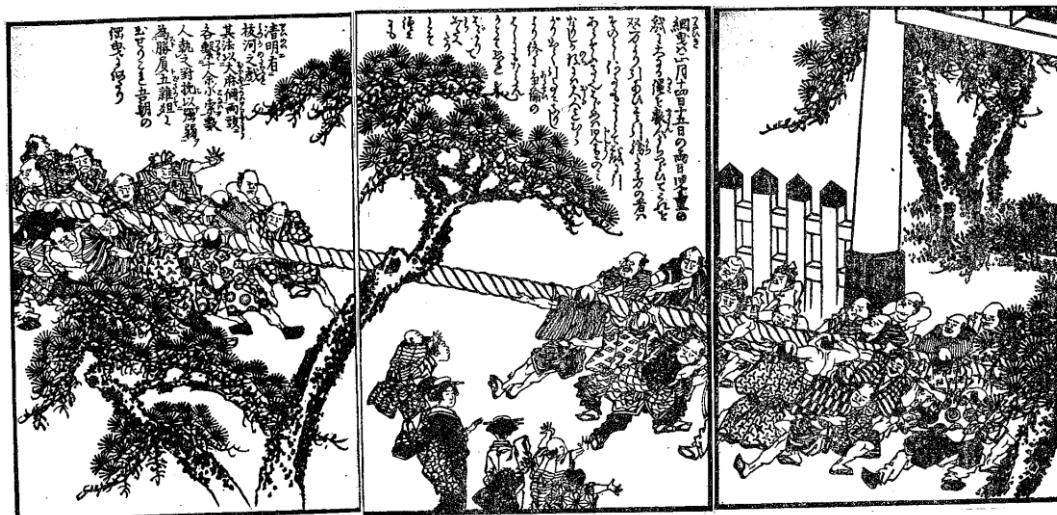
江州大津人与三井寺門前人各於原野、左右分列、互争引大綱、両方共擊太鼓、互競進引、勝方其年、各謂得福。是称綱引。至十四日朝而止。

（江州大津人、三井寺門前人と、各々原野において、左右に分列し、互いに争うて、大綱を引く、両方共に太鼓をうち、互いに競い進んで引く、勝ちし方、その年、各々福を得るという。是を綱引と称す。十四日の朝に至りて止む。）

とある（野間光辰編 1968：44）。

『諸国年中行事（大日本年中行事大全）』には挿図があって、鳥居の下で大人たちが大綱を引いている。ただしこれが『日次紀事』にいう大津人と三井寺門前人の対抗試合なのかどうかは判明しない。この鳥居がどこの神社のものなのかもわからない。

図5 大津 正月14, 15日の綱引き



今日、大津市では二箇所で綱行事が見られる。一つは坂本御田神社で1月第2日曜日に神社前の道路で行われる。東（坂下）と西（坂上）に分かれ、東が勝つとその年は豊作になるという。18間（約32m）の綱は、龍蛇の頭がつき、とぐろを巻いた形で奉納する。水神の象徴である。

写真1 坂本 御田神社：とぐろを巻く綱 2012年



もう一つは綱は作るだけで、引き合うことはないので「綱打ち神事」といわれるものである。長等神社で1月14日に行われる。長等神社所蔵の「古式綱打神事之画」の箱蓋裏書に「延長六年（928）正月十二日、志賀の土人、社前に巨蛇の形を作り、神事を行ふ」とある。928年にご神体のスサノオノミコトを鎮撫するためワラ30束で龍蛇を作り、無病息災、五穀豊穣を祈ることにはじまったと言われる（大塚1990：26-27）。『諸国年中行事（大日本年中行事大全）』には「大津上手綱うち」とあるので、「綱打ち」という名称から関係が想定される。

今日、長等神社の龍蛇の頭は拝殿に置いて神前に向け（写真2）、尾は楼門の方へ伸ばす（写真3）。以前はもっと数百メートルもあり京津線あたりまで伸びていたそうであるが（氏子さんの話）、近年はワラの不足もあって楼門にもとどいていない。

写真2 長等神社綱打祭



写真3 拝殿から楼門の方へのびた蛇体



『諸国年中行事（大日本年中行事大全）』に描かれている鳥居の下での大人たちによる綱引きについて、速水春曉斎は解説をつけています。

綱曳きは正月十四日十五日の両日児童の戯に大なる縄を数人うちつどひてこれを双方より引あひ其引勝たる方の者はそのとし何事もよしとて戯に引あらそふ事也。はじめは児童のみなりしか後には大人迄むらがり出て引事になりしより終に争論のはしにもならんかとて恐ればばかりで打たへたりとそ。漢土にも。

小正月の綱引きが子どもの遊びでありながら、単なる遊びではなく、勝利した方が「そのとし何事もよし」というように、吉凶の神事に由来していることがわかる。おもしろいのは、見ていた大人たちがわれもと参戦し喧嘩にも発展しそうになるという描写である。この記事からみれば、綱引きは子どもの正月の遊びで、大人のすることではなかったように思えるが、鳥居の前で行っているように、もともとはやはり神事として豊作や吉凶を占うものなので、地域の大人们による大切な年始行事であったはずだ。『諸国年中行事（大日本年中行事大全）』に描かれている鳥居の下での綱引きは子どもではなく大人である。

なお綱引きをおこなう場所はさまざまだが、祭礼のなかで行われる綱引きは、あきらかに神仏との関係がある宗教行事である。『日次紀事』からは「三井寺門前人」の参加がわかるが、江戸後期、天保元年（1830）刊行の喜多村信節『嬉遊笑覧』巻4（雑伎）には、一見の句を引き「東寺にて綱を引とる人はただ鬼よりつよき力なりけり」（この句は江戸前期の狂歌集である寛文12年（1672）刊『後撰夷曲集』に載る）とあるように、京都では東寺の門前でもおこなったようである（『嬉遊笑覧』喜多村 1830：129）。

大人の綱引きが大げんかにまで進展して死傷者もでるという事態もままあつた。後引するが、江戸の千住大橋の綱曳きも騒動を機に中断となっている（『東都歳時記』）。吉凶のかかった勝負事である以上、死力を尽くして引き合つた。神仏への切実な祈願は今日の科学技術文明を享受するわれわれには想像をこえ

る強さがあるが、喧嘩沙汰にでもなれば、それは風紀上、治安上好ましくないので規制されたのである。

なお速水の文の最後に、「漢土にも」とある。中国のことだが、解説には続けていわく、

清明有拔河之戲。其法以大麻綱両頭各繫十余小索。數人執之対挽、以強弱為勝負。五雜俎に出せり。これ吾朝の綱曳に似たり。

ここにいう『五雜俎』は明代、謝肇淛（1567～1624）の著書。その卷2 天部二に次のようにある。

唐時，清明有拔河之戲。…夫此戲乃市井兒童之樂，壯夫為之，已自不雅。而況以將相貴戚之臣，使之角力仆地，毀冠裂裳，不亦甚乎。

（中華書局本 1959年）

唐代、中宗のとき清明節に拔河が行われていたことは、唐の封演『封氏聞見記』卷6で明らかである。それが明代でも伝承されていた。ただ唐代の宮廷では将相貴戚之臣が行ったのであるが、明代になると拔河は、少なくとも文献上では子どもの遊びとして登場してくる。それは「市井兒童之樂」であって「雅ならず」とされたので、大人がするものではないという認識が謝肇淛にはあつたのだろう（櫻井2017：1、8）。大人の神事が時代が下ると子どもの遊戯に転化していくのは日本でも中国でも同様であった。

2. 難波 八阪神社の綱引き

秋田籬島『摂津名所図会』卷3に「難波村 牛頭天王綱引」図がある。『摂津名所図会』の出版年は寛政8年（1796）と10年（1798）に分かれていて、卷3は寛政10年1798年に出版されている（注2）。

図6 難波村 牛頭天王綱引



難波八坂神社は現存し、浪速区元町にある。牛頭天王社としてスサノオノミコトを祀る。

秋田籬島の筆に次のようにある。

毎歳正月十四日、産子の人々左右に分列して大綱を争ひ引きて、其勝方其年福を得るといふ。さいつ頃当国池田にも此祭事ありて、十六七歳ばかりなる角前髪の男此綱引に出て互いに引争ひ、終りて我宿に帰り食もくはず転ながら寝ねて起せども起ず、三日半続け寝けしたるといふ。此綱引の事は唐の時大綱を楽に引合ひ、強弱を見て勝負とする事五雑組にも見へたり。

この難波の綱引きについては、図会の出版年より早く、享保4年（1719）初演の近松門左衛門『平家女護島』にみえる。

近寄っては叶はじと難波、瀬尾が無分別。巻轆轤の大綱を両方四、五間引つ張つて、巻い取らんとひしめいたり。ハアゝ子供遊びの綱引きか。悪あがきする餓鬼めら。これ見よと片足上げ、やあうんと氣をこんで。ま物をふつゝと踏み切れば、瀬尾は武士のきづ難波。西瓜転ばすごとくにてころころ転びうつたりけり。

とあり、「難波」から綱引きを連想していることから牛頭天王社の神事であることがわかる。難波八坂神社の綱引きの起源は不明であるが、18世紀のはじめには存在したといえる。またここにも「子供遊びの綱引き」とあり、綱引きに対

する認識は相変わらず児戯であった。

図会の解説文からポイントを拾うと、

1, 正月十四日の開催。

いまは1月の第3日曜日におこなう。

2, 年占だが単に「福を得る」というだけで、特に豊作豊漁のことは言っていない。

3, 池田にもあった。

いまは廃れたが、かつて池田市の伊居太神社に綱引きがあったようである
(宮本編 1962 : 49)。

4, 十六七の若者が引き競い、終わると三日半寝続けるほどの激しい争いであった。

5, 鳥居の前の街路で引いている。

いまは境内で綱を顔の位置まで持ち上げて、「難波の綱引きヨーイヨイ」と言いながら引き合い、最後に惠方の方に向いて引いて終わるだけの簡単な形になっている。そのあと綱を台車に乗せて町内を巡行する。かつては写真4の鳥居の前で勇壮に引いたものと思われる。

写真4 難波八坂神社の鳥居



6, 『五雑組』(『五雑俎』のこと) を引く。

速水春曉齋『諸国年中行事 (大日本年中行事大全)』、天保3年 (1832) 刊に同じ。この時代、綱引きは中国の『五雑俎』を参考にしていることがわかる。

7, 御幣が今日のとおなじ形

絵図を見ると、見物客のなかに竹棒に指した御幣をもつ人がいる。これは今日も参拝者などに配る「家内安全、商売繁盛、厄除祈願」のお札をつけた竹串御幣であろう（写真 5）。

写真 5 右の通行人がもつ御幣。

綱につけた御幣も同じ。綱の町内練り歩きの様子。



8, 綱の結合部に突起した部分がある

これは男根に見立てられている。今日では写真 6 のような形に変形している。

写真 6 綱中央の結び目の突起



9, 今日八坂神社で行われている綱引きの綱は龍蛇の形をとっている。

現在の八頭は、写真 7 のように細い綱をつける形で表象する。

写真 7 オロチの八頭



綱がいつから龍蛇に見立てられていたかについて、江戸期にはすでにそうであったという考えがある。『摂津名所図会』には記載がないが、安政 2 年 (1855) 以降の執筆になる (注 3) 晓鐘成『摂津名所図会大成』巻 8 には「難波綱引」として次のようにある。

例年正月十四日村中所々にてあり就中宮の前にて引合もの大にして見事なり。遠近より看客つどひて甚賑わし。

綱ひきや左の利し大おのこ	宇月
綱引きや去年の八束穂より合せ	蓼太
綱曳や何そ有たき諷ひもの	而得

大島蓼太 (1718~1787) は江戸中期の俳人。その句に「八束穂」とあるので、幕末になって八岐大蛇の姿になっていたのではないかという推測である (伊藤 2001:31)。しかし八束穂が直接に八岐大蛇の比喩になるのかは疑問である。「去年の」とあることから単に材料としての稻わらを指しているだけだと考えられる。なお『摂津名所図会大成』には挿画はない。

一方、摂津には龍蛇と綱引きとの関係を指摘できる行事が他にある (速水春曉斎『諸国図会 年中行事大成』巻 2、2003 : 155)。

二月八日

摂津国島上郡原村天王祭 原五ヶ村の生土神にして牛頭天王を祭る。

社前に縄をもつて大きなる蛇形を作り、松の木二本を立て是に泛らしめ、其上に方一間の的を上げ、是を蛇の目に表し、神祭頭家の者上下を着し、川向ひより箭二手を携へ、的をねらひ、甲の矢を射、乙矢を射るを相圖に、五ヶ村二ツに別れ、彼蛇形の頭を上組四箇村上條村 東條村 中村 西條村の者、山上へ引登んとするを、下組一箇村下條村の者、蛇形の尾を曳て山下に到んと川を間て互に曳合事綱引のごとく、終に蛇形を曳断て左右へ分る下組は一村なれば加勢の者ありとぞ。傳云往昔此川の渕に悪蛇住しを退治せし遺風なりとぞ。

島上郡原村の天王社で 2 月 8 日に行われた祭礼である。社前に縄で大蛇の形

をつくり、天王社を産土神とする 5 か村を上組（上条、東条、中、西条）と下組（下条）に分け、上組は蛇の頭をもって山上に引き上げ、下組は蛇の尾をもって山下に引き下ろそうと、互いに川を隔てて蛇体が引きちぎれるまで引いた。言い伝えでは、昔川の淵に悪蛇がいたのでその退治をする遺風だという（注 4）。

天王社はいうまでもなく牛頭天王すなわちスサノオノミコトを祀るので龍蛇と関係がある。明らかにこの儀礼はヤマタノオロチ退治の再現である。その退治を射的や綱引きという行事によって象徴させている。

速水春曉斎『諸国図会 年中行事大成』は、文化 3 年（1806）に刊行されたものなので、秋田籬島『摂津名所図会』寛政 10 年（1798）と年代は近い。そのため原村の龍蛇綱からみて、難波の八坂神社にも同様の観念があったかもしれないが、文献上では確認できない。

では今日八坂神社にみられるようなオロチの形態は、いつごろから見られるようになるのか。大津の長等神社の「綱打ち神事」も 1 月 14 日に行われた。先に述べたように、長等神社所蔵「古式綱打神事之画」の箱蓋裏書には、「延長六年（928）正月十二日、志賀の土人、社前に巨蛇の形を造り、神事を行ふ」とあった。開催日と綱を龍蛇に見立てることは八坂神社と同じである。それはともに祭神が八岐大蛇と関係するスサノオノミコトであるからだ。

しかし文献で確認できるのは、今のところ南木芳太郎（1931：87）に、「御神体が素盞鳴尊である處から、出雲の簸の川上で八頭の大蛇を退治給ひし古事に倣ひ、八頭八尾の大蛇に形とて作ったものであるといふ。」とあるのが初見である。

なおこの摂津原村にみられる蛇形の綱は、今日でも祭礼として伝承されている。高槻市大字原の八坂神社で毎年 4 月第一日曜に行われる「春祭歩射神事」（大蛇祭とか蛇祭りと通称）である。長さ 30m ほどの大蛇に見立た大綱をヒノキの丸太に巻き、それを担いで村内を練り歩く。その後『諸国図会 年中行事大成』に言うように、的をつくってそれを射ることは行われているが、川をはさんで引き合うことはしていない。

現在、原は下條、西條、中村、川東の 4 地区に分かれ、輪番でこの祭礼を実施していて、五穀豊穣を祈る祭りとなっている。「以前は村を上下に分け、綱を神社に運ぶとき、一方が前進するのを一方が押し返すといった綱引きを思わせる作法があった。」（三隅編 2007：387）というが、ここにいう「以前」がいつ頃のことかはわからない。

蛇形の綱を川にわたすという点に注目すると、類似の行事は奈良県高市郡明日香村稻渕や柏森の綱掛け祭、生駒郡平群町樫原の綱打ち行事（勧請綱掛け）な

ど年頭の勧請綱掛けに見ることができる。たとえば生駒郡平群町樋原では、1月3日、竜田川に住む龍神を象徴する雄綱と雌綱を編み、川に渡す。村外から悪疫が入ってくるのを防ぐためである。綱引きはしないようだが、龍神信仰、境界における防御、川に綱をかけるなど、勧請綱掛けの基本形は江戸期の原村の事例と変わらない。

3. 江戸 千住大橋の綱引き

西の大坂の綱引きを見たので、次は東の江戸の綱引きを見ておこう。

天保 9 年 (1838) の斎藤月岑『東都歳時記』卷 2 夏之部六月に千住大橋の綱引きが出ている。ただし「今はなし」というから天保 9 年以前の出来事を留めることになる。

千住大橋綱曳（今はなし。小柄原天王の祭礼によつて、橋の南北にて大綱をひきあひ、その年の吉凶を占ひけるが、ややもすれば鬪諍に及びしゆゑ、両村言ひあはせてこのことを止めけるとぞ。また今日、神輿大川を渡せしことありしが、これも絶えたり。）

図 7 千住大橋綱曳



また絵図には次の文が書かれている。

六月九日 千住大橋綱曳

此行事近年なし。斎藤山人『路志』引『大明一統志』曰、拔河之戯、湖広帰州俗。以麻組巨竹分朋而挽。謂之拔河。以定勝負而祈農桑。拔河のこと『五雜組』（五雜組のこと）にも見えたり。

（この行事近年なし。斎藤山人の『路志』に『大明一統志』を引きて曰く、拔河の戯、湖広帰州の俗。麻組巨竹を以て朋を分けて挽く。これを拔河と謂ふ。以て勝負を定めて農桑を祈る。拔河のこと『五雜組』（五雜組のこと）にも見えたり。）

綱曳や左乃利し大男 宇月

（市古・鈴木 2001 上：236、237）

禪姿をした十数人の大人の男たちが大橋を境に双方にわかれ引き合っている図である。ここからわかることは、

1, 六月九日におこなった。

小柄原天王の祭礼の祭礼なので、牛頭天王の祇園祭になる。

2, 橋の南北に分かれて引き合う。

荒川にかかる千住大橋を区切りに千住南組と北組に分かれていたので、その対抗試合であった。このあたりは浅草から奥州道に出る宿場であったことから、「橋上の人馬は絡繹として間断なし」（『江戸名所図会』卷6。1979：487）。絵図では綱曳きをしている横を人馬が通り過ぎ、交通の賑わいが感じられる。

橋は生活空間を区切る境界性をもった場である。天王祭のような鎮送の意味をもつ祭礼のなかで行われることを考え合わせると、この綱引きには「以て勝負を定めて農桑を祈る」という年占以外にも災厄や悪霊の鎮送の意味があったのではなかろうか。摂津原村の天王祭での綱掛けは、川に綱をわたす形であったが、橋上での綱引きは実質的には川に綱を架けるに等しい。したがって境界での悪疫退散の意味もあったと推測する。

さらに、つくば市小田で行われる同じ天王系の祇園祭では、町内の境で神輿と獅子が対抗するように、祇園祭（天王祭）には集落の境界などで祭具をもつた対抗儀礼がみられるのも参考になる（注5）。千住大橋でも同日「神輿大川を渡せしことありしが、これも絶えたり。」とあるので、あるいは神輿の対抗儀礼もあったかもしれない。

3, その年の吉凶をうらなう。

6月という半年を経過した夏に年占をおこなうというのは、1年を二等分した

節目として意識しているであろう。水無月朔日を準正月とみる考え方の反映かもしれない。

同じく夏に行われる盆綱引きは先祖供養と関わるが、荒ぶる神スサノオを祀る祇園祭では御靈信仰との関係で厄災・悪病の駆除が考えられる。

4. 聞諍に及ぶにいたり、中止となつた。

吉凶をめぐって神意を占う行事であるため真剣と興奮のあまり喧嘩も絶えないこと、前述の大津正月 14, 15 日の綱引きと同じである。

5, 『大明一統志』を引いて中国では麻縄と竹を使ったというが、日本でもその事例はある（櫻井 2017 : 16 以下）。千住大橋の綱を見ると細く、ワラではなく麻で編んだもののように見える。

6, 秋田籬島『摂津名所図会』寛政 8 年（1796, 1798）、速水春暁斎『諸国年中行事（大日本年中行事大全）』、天保 3 年（1832）刊と同じく『五雑俎』を引用している。

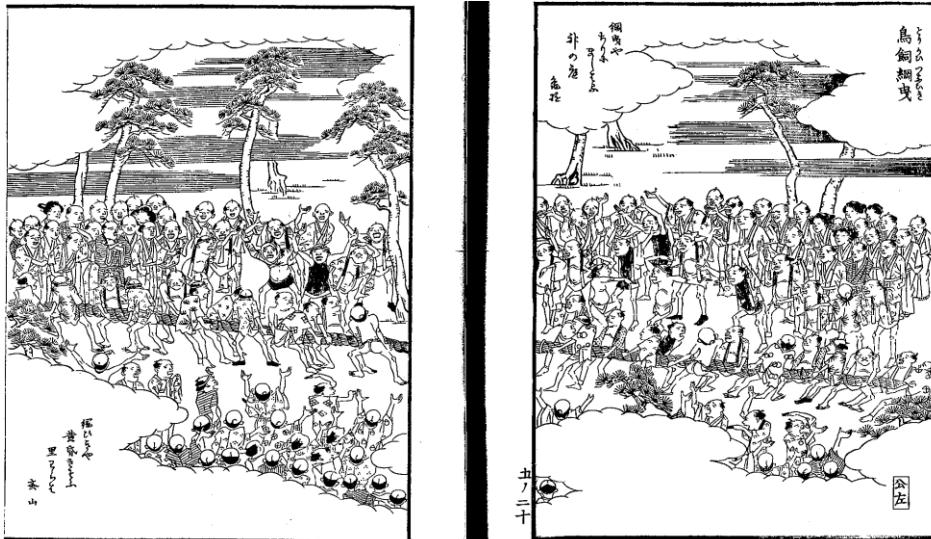
4. 淡路島・鳥飼八幡宮の綱引き

『淡路国名所図絵』巻 5 に「鳥飼綱曳」の図がある（図 8）。

編者暁鐘成は、寛政 5 年（1793）～万延元年（1860）の生卒。先に引用した『摂津名所図会大成』の著者でもある。図絵の出版は明治 27 年（1894）であるが、稿本は嘉永 4 年（1851）にできていた（『日本名所風俗図会』13：解説（長谷章久）、P607）。

図には「綱曳やちりにまじはる神の庭」亀遊と「綱ひきや黄昏きそふ里わらは」蚊山の二句が添えられている。

図 8 鳥飼綱曳



また「鳥飼別宮」のところに 8 月 15 日の例祭である神輿渡御について次のようにある。

また八月祭礼神輿還御ののち、拝殿の前において綱曳あり。その次第は前日産地の家ごとより藁を集め拝殿に参籠し縄を絹ふ。長さおほよそ七間ばかり、太さ廻三尺にして、翌日祭礼ののち神境においてこれを曳き奪ふ。西方は鳥飼下村、東の方は鳥飼上中の両村、および角川村の産地子等數万つどひ集まり、壯勇の者は赤裸にて禪布綺羅を飾り、応声を發して曳き勝つてもつて豊饒の吉兆とす。西の方は鳥飼下村のみといへども曳き勝つ事多し。これ常に漁罟をもて業とし綱をひくこと多年に馴れたるゆゑなりとぞ。この綱曳終はりて小童二人、二番勝負の神事角力を興す。この事終はりてのち通常例の角力会あり。

鳥飼別宮は鳥飼三村（上中下）と角川村の産土神で中村にある。

この記事からポイントをまとめておくと、

- 1, 8 月 15 日の祭礼である。
- 2, 村を東と西に分けて引く。
- 3, 氏子が数万人も参加する大規模な行事である。
- 4, 勝利した方が豊饒の吉兆を得る。
- 5, 農民と漁民による予祝儀礼である。
- 6, 綱引きのあとに角力がある。

鳥飼別宮はいま兵庫県洲本市五色町鳥飼中にある鳥飼八幡神社である。この社は石清水八幡の別宮である。いまも氏子地域は鳥飼の上中下三村と角川である（和歌森 1964 : 226）。

『淡路国名所図絵』には 8 月 15 日とあるが、鳥飼では新暦旧暦ともいまこの日に綱引きはない。毎年 10 月第 3 日曜日に行われる秋の例大祭は、神輿、舟だんじり、布団だんじりなどが出る勇壮なお祭りであるが、この日に境内で大綱引きをおこなう。

直径約 80 センチ、長さ約 20~30 メートルの大綱を浜と陸（里）に分かれ、氏子たちが豊漁、豊作を占う神事である。里が勝てば豊作、浜が勝てば豊漁である。言い伝えでは 200 年の歴史があるというが、図絵の編者暁鐘成の生存時期からみて妥当であろう。

筆者は 2012 年 10 月 21 日にこの秋祭りを見学したが、図絵に記されている内容がほとんどそのまま伝承されていることに驚いた。

綱引きの次第は、今日の次第とほぼ一致している。綱打ちは本祭の前日に各村が稻わらを持ち寄って行うとあるが、今日も同様である。「祭礼ののち神境においてこれを曳き奪ふ」というように、今日も神輿、だんじりなどの巡行が終了後、日が落ちてから行われる。筆者が見た日は夜 9 時半をまわっていた。

「壯勇の者は赤裸にて樺布綺羅を飾り」とあるように、若者たちはいまも裸の樺姿である。綱の大きさは「長さおほよそ七間ばかり、太さ廻三尺にして」とある。片山嘉一郎『淡路之誇』下（片山 1932：332）では、長さ約 20 間、太さ 4 尺という。今日の綱は、長さ約 20~30 メートル、直径約 80 センチ程度である。

「西の方は鳥飼下村のみといへども曳き勝つ事多し」とある。2012 年もやはり西方が勝利した。また江戸時代には奉納相撲と相撲大会があったようだが、いまは行われていない。この点だけが違っている。九州その他の地域で綱引きは相撲とセットになっているところが多いが、洲本でもかつてはそうだったことがわかる。

わが国で八月十五夜の日に綱引きをするのは、南九州に多い。兵庫県にあるこの「十五夜綱引き」は、列島で東限といえる。なぜここに十五夜の綱引きがあるのかについて、洲本市教育委員会が境内に立てた解説板には「海人が伝えた南方系習俗であるといわれています。」とある。なにを根拠とした言い伝えなのかは不明である。南方の海人が北上して伝えたのか、淡路の漁民が九州方面に漁に出て学んで帰ってきたのか、いずれも可能性としてはありうるが、文献上の裏付けはない。

写真 8 兵庫県洲本市五色町鳥飼八幡神社の大綱引き



なお淡路島では、以前は他に旧津名町中田で旧暦9月9日のウシ神の祭りに、福良で5月5日端午節に綱引きが行われていた。

福良の綱引きは船の運なおしと農漁民の予占行事であり、東（陸）が勝つと豊作、西（海）が勝つと豊漁とされた（和歌森1964：90、121、244、337）。片山嘉一郎『淡路之誇』下（片山1932：332）によると、福良の綱曳きは船主が提供する綱を用い、東西2本の綱を中央で折り曲げて組み合わせ、輪の中に栓を差し込んで繋ぐものだった。綱の延長約十町、数百千の老若男女が雲集して引き合ったというからまさに大綱引きであった。勝った方が大漁を獲るというので、もっぱら漁民の綱曳きのようだ。

端午節に綱引きをするのは今日では鳥取県の日本海沿海部に圧倒的に分布が偏っている。淡路島になぜ端午の綱曳きがあるのか、節句の意味と関わらせて説明できる資料はいまのところ見あたらない。

5. 九州の綱引き

5-1. 薩州の八月十五日

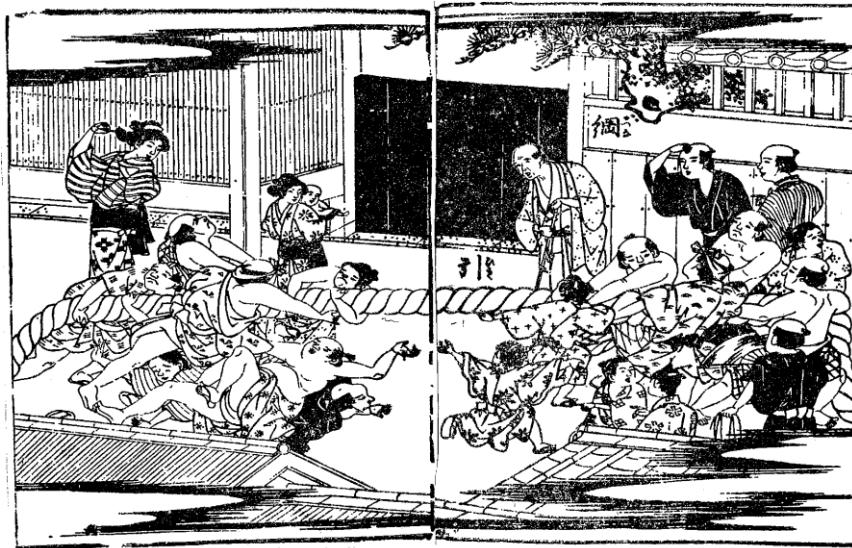
京都、江戸、難波、摂津、淡路とみたところで、次に九州の事例をみてみよう。今日でもそうだが南九州では8月15日中秋の名月の夜におこなうところが多い。その伝統は江戸時代の文献までたどることができる。

橋南谿（宝暦3年（1753）～文化2年（1805））の旅行記『西遊記』続編巻5（寛政7年：1795）に

薩州鹿児島、八月十五日、太き腕の如き長さ半町壱町にも及べる大綱を作り、大道の真中に引渡し、小児夥敷集まりて左右に別れ、其綱を引合ふ事なり。後には夜の事なれば若きをのこ皆出て行く。其賑やかなる事祭の神輿のわたるが如し。是を綱引といふ。古代には上方にも有しと聞しが、今辺土にのみ残れり。

（橋南谿『東西遊記』2 宗政五十緒校注1974：183）

図9 薩州鹿児島の八月十五日の綱引



薩州鹿児島というだけで、具体的地名はないので、鹿児島のどこの綱引きの図であるかはわからない。鹿児島県には広範囲に十五夜綱引きが分布している。大規模なものとしては、薩摩川内市の「川内大綱引」が筆頭であろう。いまは9月22日に行われている。慶長年間（1596～1614年）にはじまったとされる。

『西遊記』には、中秋の夜に綱を引き合う目的は書かれていない。今日の十五夜の綱は龍蛇の象徴とされ、月への信仰などから、脱皮、死と再生などの観念と関わり、豊作繁栄、健康祈願、雨乞いなどの目的がある。詳細は小野重朗『十五夜綱引の研究』（小野 1997）を参照。川内綱引きは、現在の考えでは、勝利した陣営が1年間商売繁盛として栄えるという。

橋南谿の記事からポイントを整理すると

1, 大綱である

絵をみると両腕で抱えるぐらいの太さがある。長さは半町一町にも及ぶというので、50～100mを越えるものだった。一本綱を引きあっている。現在の川内大綱引きの綱は一本綱で、長さ365m、重さ7トンという（注6）。

2, 日中は子どもの行事であり、夜は若者の行事だった。

現在、鹿児島の十五夜綱引きも多くは二部構成で、昼間の子ども組による綱引きや相撲と夜の青年組の綱引きがある。この形は江戸時代まで遡れるのかもしれない。

3, 「古代には上方にも有しと聞しが、今辺土にのみ残れり」

これは事実ではない。たとえば難波の綱引きはずっと今に至るまで存続している。

鹿児島の8月の綱引きについては、速水春曉斎『諸国年中行事（大日本年中行事大全）』巻5の八月にも「（薩）鹿児島綱曳 薩摩国にあり」と簡単な記述がある（宮尾与男注解1981：167）。ただし絵図はない。

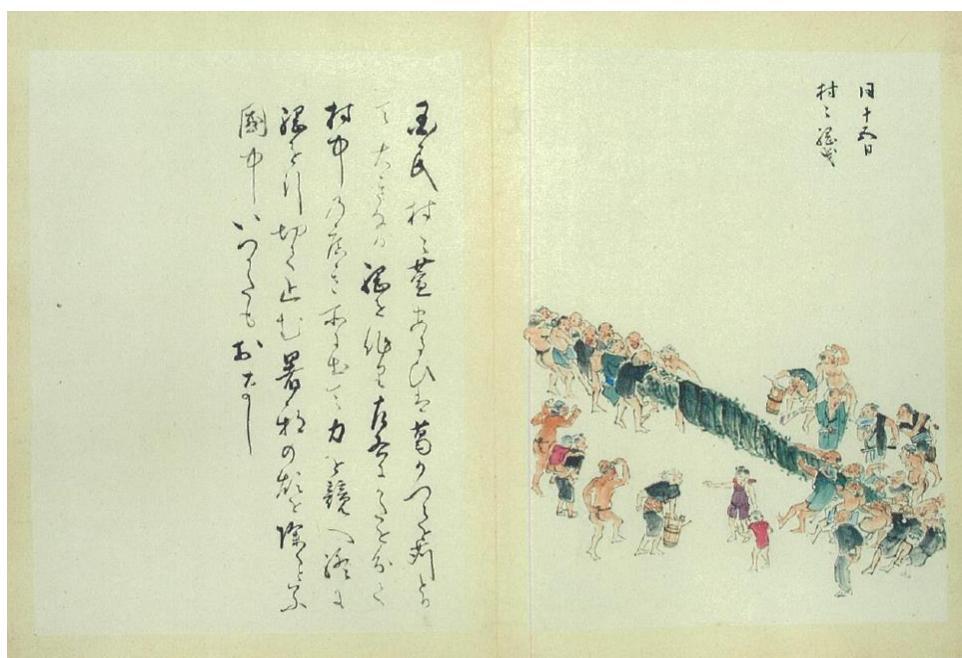
九州については他に2箇所の綱引きがある。

一つは筑前の「盆綱」であり、一つは今でも大隅地域に伝承されているカギヒキである。

5-2. 筑前の盆綱

『筑前歳時図記』に絵図がある。この歳時図記の成立年代は不明だが、江戸時代末期とおもわれる。

図10 筑前 村々綱曳



図の左には次のような記述がある。

同（七月のこと）十五日 村々綱曳

国民、村々、萱あるいは葛かづらを刈りとりて、大きなる綱を作り、左右にかたを分けて、村中の広き所に出でて力を競べ、終に綱を引き切りて止む。暑邪の煩ひを除くといふ。國中いづかたもおなじ。

1, これは7月15日の「盆綱引き」といわれる行事である。

筑前、筑後に広く分布している。現在、福岡県には、福岡市内に田隈の盆押し・盆綱引き（早良区）、西浦のかずら引き（西区）、草場の盆綱引き（西区）などが新暦のお盆となる8月15日に行われている。糸島市では8月15日に大入盆綱引きがある。また筑後になるが、筑後市の久富盆綱曳きは8月14日に行われている。

2, 綱の材料が「萱あるいは葛かづら」

いま田隈は茅とワラ、西浦、大入、草場はかずら（葛）である。

写真9 西浦のかずら引き



3, 「終に綱を引き切りて止む」

草場では綱が切れるまで行う。もし切れなければ、綱に切れ目を入れて、意図的に切り、綱引きを終える。田隈では、綱引きは若者たちが肩車をして押し合う「盆押し」と並行しておこなうが、綱に切れ目をいれて綱が切れると盆押しを行い、結び直されるとまた綱引きが再開する。この繰り返しで進行していく。

写真 10 田隈の綱切り



4, 「暑邪の煩ひを除く」のが目的

盆行事の一つなので、仏教的要素として精靈を綱に乗せて送り迎えをするとか（草場、田隈の盆綱引き）、地獄の亡者を綱で引き上げ救出するとかいわれる（久富盆綱曳き）。綱引きの最後に綱を斧などで断ち切るのは、祖靈が帰還する道を作るためともいう。田隈の綱は龍蛇にとぐろを巻く形で氏神である地祿神社に奉納される。この形から九州南部の十五夜綱引きと同様に豊年満作を水神に祈願する目的もあったようだ。

また西浦のカズラひきや久富盆綱曳きのように子どもも参加し、ショウキダイジン（鍾馗大臣）が出てきて、子供たちの厄災、疫病神を追い払うように夏の「暑邪」を払う意味もあった。

写真 11 久富盆綱曳き



盆綱は現在、日本では九州北部と関東北部に多く分布している。九州の盆綱については（櫻井 2012b）を北関東の盆綱については（櫻井 2012a）を参照。

もう一つはカギヒキである。

5-3. カギヒキ

『三国名勝図会』巻35の大隅国贈嶽郡の日光神社に「打植祭の鉤木引」とある。所在地と行事名を記すだけで絵図はない（『日本名所風俗図会』15、1983：504）。『三国名勝図会』は、天保14年（1843年）に薩摩国、大隅国それに日向国的一部を含む領内の地誌や名所を薩摩藩が編集したものである。出版は明治38年（1905年）になる。

打植祭とは「正月から二月の頃に行うもので、境内を田にみたてて耕し、馬鍬を牛にひかせてならし、糲種などをまき、時に田植の真似までも行なう祭」（小野 1964:34）のこと、鹿児島県と宮崎県南部の南九州に濃厚に見られる。この春の農耕予祝行事にワラ縄ではなく、樹木そのものを使ったカギヒキが登場する。

現在、鹿児島県曾於市に日光神社はあるが、打植祭やカギヒキはもう行われていない。よく知られているのは、大隅地方のもので、志布志市安楽の山宮神社・安楽神社の春祭り（2月第2土曜と翌日曜）や鹿屋市高隈中津神社のカギヒキ祭（2月第3日曜）などの田遊びであろう。それについては筆者も報告したことがある（櫻井 2016）。

カギヒキというのは、股木を合体させて引き合うことからそう呼ぶ。たとえば高隈では上と下の二組にわかれ、それぞれが山からニレやエノキなどの木からオカギ、メカギを伐り出し、中津神社の境内まで運ぶ。雌雄二体の股を引っ掛け、それを綱引きのように引き合い、勝った方が豊作となるという予祝儀礼である。

木は山神が宿ったご神木で、それを平地の田（田遊びをしている境内）に降ろして男女交合のように引き合うという形態は、山の神が春になると山から降りて田の神となり、その年の稲の豊作を見守るという神の山里往来觀念および山神田神交替觀念を、祭りという劇場舞台のなかで演じているものであろう。

カギヒキが山の神、田の神関係していることは、奈良県北東部から伊賀地域、名張地域、滋賀県甲賀地域にかけて広く分布する山の神信仰の行事で使われることからもわかる。

速水春曉斎『諸国図会 年中行事大成』巻1 正月 8日に滋賀国伊賀郡上野

村の「鍵引」として

今日山神の靈木に注連縄を結ぶ、頌文を唱ふ。これを鍵引といふ。山より田畠へ勧請する意とぞ

(速水春暁斎『諸国図会 年中行事大成』、2003：68)

とある（注7）。図はない。

山の神の祭祀においてカギヒキを行うのは、いまでも上野をふくむ伊賀地方の各地でみられる。1月7日に木の枝で鉤をつくり、それを注連縄に掛けて引く。山の神は山仕事に従事する人だけではなく、農業をなりわいとする人たちにも信仰があり、山神を田神として里に呼び寄せ、福や豊作を神靈の宿る木カギで引き寄せるために行う初春の予祝儀礼である。「山より田畠へ勧請する意とぞ」とあり、江戸時代にすでに山の神が田畠に降って田の神になる去來伝承が存在したことを確認できる。

『年中行事大成』に鍵引のとき「頌文（じゅもん）」唱えるという。これは今でも伝承されていて、「山の神ヨーオイ、わせ、なかて、おくての実もヨーオイ、大豆、小豆、四十四の作り物ヨーオイ、日本海産、加賀越前の糸綿までもヨーオイ、よろずの大豊作、みなこのところへ引き寄せよヨーオイ」などと唱えている（唱え言は三重県教育委員会編 1997：86）。

筆者は2014年1月に三重県で数カ所カギヒキを見たが、引き方には写真12の津市美里町高座原のように一方からだけ引く場合と写真13の伊賀市川北のように注連縄をはさんで両側から引く場合がある。

写真12 津市美里町高座原のカギヒキ



写真 13 伊賀市川北のカギヒキ



写真 14 津市稻葉町上稻葉愛宕神社 カギ



写真 14 は愛宕神社のカギで、注連縄にびっしりと掛けている様子がわかる。この山の神に木カギを掛けることは江戸時代まで遡ることができる。

菅江真澄（1745～1829）の『月迺遠呂智泥』は、秋田県の太平山について記した文化 9 年（1812）の紀行文だが、そのなかに神社の鳥居や杉の木の枝に葉つきの木カギがびっしり掛けられた絵がある。地元ではそれを山の神への「逆樹」と言う。

山の神渓といふを分々いたれば、うべも大山祇の社ぞあんなる。廣前に數の鳥居のあるごとに、木の枝の杖（かぎ）をひしづと投掛たり。又大なるくろ木を三尺ばかりにきりて斧して皮うち立て、これをあまた社の@（土偏+旁）におしたてたり、とへばいらへて逆樹と謂ふ。蝦夷の木幣を略に造りなしたるにひとし、榊のこゝろもやありていへらんか。

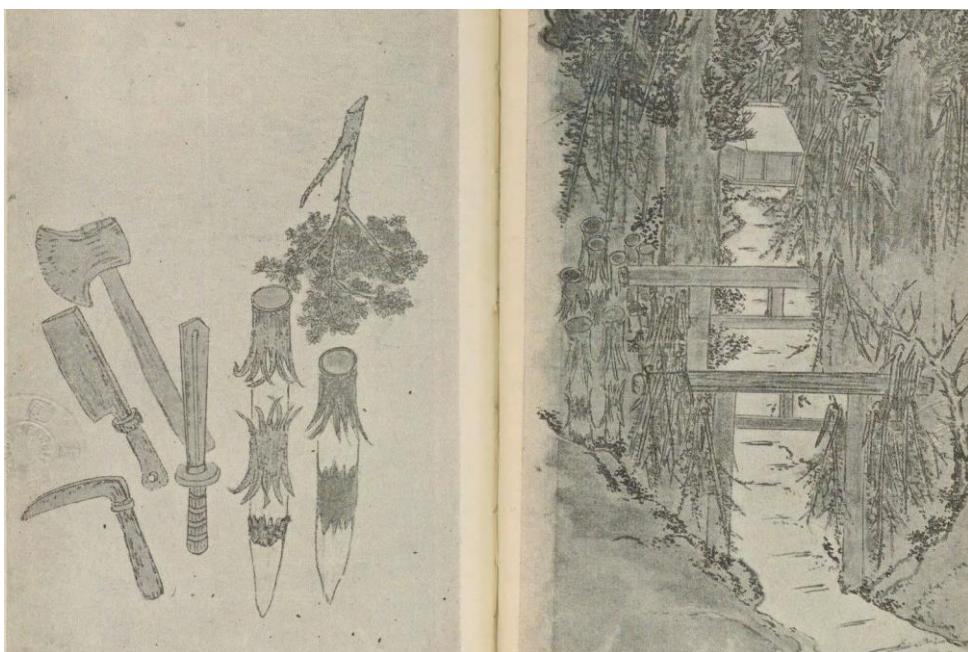
（内田・宮本編 1973a : 322-323）

菅江真澄が逆樹をアイヌの祭具イナウ（木幣）に等しく、榊のこゝろがある、というように山神への手向けものであり、神靈の依り代でもあった。このように山の神に供える木カギには神靈が宿るので、それを使って引き合い、勝負することで神意をはかる年占が、鹿児島の2月の田遊びや三重の山神を祭る正月のカギヒキ行事の中に残っているのではないだろうか。ちなみに秋田ではこの木カギを使って引き合うことはないようだ。

写真 15 逆樹

左：祠に奉る木製の斧、剣、木幣など。右上にあるのが、葉付きの木かぎ（逆樹）

右：鳥居の両側の木にびっしりと掛けられた逆樹



なお規模は小さいが、カギヒキの事例に加えてもいいように思えるのが、愛知県豊橋市の安久美神戸神社で2月11日におこなわれる鬼祭の御玉引神事である（注8）。

神社は10世紀平安時代の創建とされるが、この豊年と厄除けを祈願する田楽がいつごろからはじまったかは定かではない。御玉引神事はこの祭りの最後におこなわれ、農作物の豊凶を占う最も重要な神事である。村落を福地（低地）と干地（山間部）に分け、縄で巻いた榎玉をそれぞれの射手が榎の枝で作った「御鉤」で縄に引っ掛け、引き合って勝負を決めるものである。福地が勝つと雨が少なく低地が豊作になり、干地が勝つと雨が多くなり、高地が豊作になるという。年占に木カギをもちいるのは、まさにカギヒキ神事であり、エノキを使うのは大隅半島と同じである。

写真 16 豊橋市安久美神戸神社鬼祭の御玉引神事



6. 秋田の大綱引き

菅江真澄を引用したので、次に東北の大綱引きの絵図を示しておきたい。秋田県刈和野の大綱引きと大曲の大綱引きがいまでも有名である。菅江真澄の『月の出羽路』には刈和野と神宮寺の大綱引きの記録がある。神宮寺の大綱引きは昭和28年まで行われていたが（神岡町史編纂室編 2002：435）いまは廃れている。大曲の大綱引きについては『月の出羽路』には記載がない。

図 11 が神宮寺の大綱引きである。菅江真澄が神宮寺に来たのは、文政 10 年（1827）であるので、それ以前から綱引きがあったといえる。

図 11 神宮寺の綱引き



絵図は地元の画家富樫恒秀が描いているので実写に近いとみてよいだろう。
絵の添え書きには次のようにある。

神宮寺郷の驛路の綱曳かた

驛館長がもとより役人出て、孫びさしの上に立て、今ひとりは長竿のうれに大幣つけてもてり、此綱曳き東西の人つかれぬれば、大幣をふりもて息らはせけるなはし也。

真澄

来ぬ秋をみとしの神のをしへとていつれしかまのかちやまつらむ

『月の出羽路』の本文には次のようにいう。

此事（鳥追い行事のこと）をへぬれば、うまやのをさが門を中に綱曳のためしあり。六日、七日ごろより軒ならぶ家々に入りて、千年の寿と里童唱ふれば、藁を一把二把三把四把とみなそれぞれに出してとらせぬ。此わらを集て大綱を糾ひ、東西と分て雌綱雄綱二筋を会て、其大綱に千筋の小綱を木の根の生ひわたりたるやうに付て、此小綱にこゝらの人男女、童、盲人にいたるまですがりてひきしらふに、寒わたる夜ごろもしらず。かたぬき身に汗して雪ふみしたりき、負劣らじとて曳に引ぬ。雄綱（カミヅナ）勝ぬれば秋の田の実のよからず、雌綱（シモヅナ）曳キ勝ッときは、秋の千町も八束の稻

穂うち寄せて民草栄ふといへり。

(内田・宮本編 1973b : 182)

これは今は消滅した神宮寺の大綱引きの様子だが、かつては子どもたちが家々をまわり、「千年寿」と唱えてワラを集め、それを縫って大綱を2本作ったことがわかる。雌雄の2本に小綱をつけ、夜、だれもがみな参加して引き合つた。いま刈和野では「千年寿」と唱えながら各戸からワラを集めることはないが、大綱に小綱をつけ、これをつかんで老若男女が引き合うのは変わらぬ光景である。ただ刈和野では、雄側が勝つのはよろしくなく、稲の豊作のためにには雌側が勝たねばならないという言い伝えではなく、上町（二日町）の雄綱が勝てば、米の値段が上がり、下町（五日町）の雌綱が勝てば、豊作になるといわれている。

また鳥追い行事のあと綱引きになるが、『月の出羽路』にも引用されている（内田・宮本編 1973b : 182）『六郡祭事記』には「（正月）十五日、神宮寺八幡のさい鳥綱引」とある。いま大曲の綱引きでは諏訪神社で鳥子舞を奉納してから行っている。『六郡祭事記』では勝敗の意味については、「もし雌綱切ることあれば米價のぼるとし、雄綱切れば米價やすしとするためしなり」という。

刈和野の綱引きについては、『月の出羽路』に引用はないが、『六郡祭事記』には神宮寺八幡のさい鳥綱引につづいて同日（十五日）「刈和野のムマヤ市神祭」に「大綱を出し中幣帛の處を正当として里人みな立わかれて引合なり。」

（秋田叢書刊行会 1929 : 6）という。今日でも刈和野と大曲の綱引きは、市神様の祭事としておこなわれている。交易による金銭の授受がおこなわれる市場には守護神がいて、その宣託を伺うための勝負であった。

市神様の前で綱引きをする事例は、他に福島県会津美里町や会津坂下町の「大俵引き」がある。俵に綱をつけて引き合うめずらしい正月行事であるが、やはり米の値段や豊作を占う。

写真 17 市神様と大俵 会津坂下町



7. 能登の綱引き

夏の綱引きには盆の綱以外に、七夕の綱引きがあった。石川県輪島で明治以前、7月6日に行われていた事例をあげておく。

石川県輪島市鳳至町の住吉神社ではもと7月6日の夜、綱引きが行われていたが、明治7年以降は中絶している（若林編1954：377）。

図12は神社所蔵の絵巻物である。この絵巻は詞書によると、明治7年以降廃れた祭を忘れないために、大正5年5月に作成したとある（注9）。絵図自体は江戸期のものではないが、明治7年以前、江戸末期の様子が描かれているものとして史料価値はあるのであげておく。

綱の材料は和船に使われる縄。淡路福良の綱が船主が提供したものであったことが想起される。これを農民中心の上組と漁民船夫中心の下組の二つに分かれ、親綱と枝綱を作り、鳥居前で引きあう。上組が勝てば豊年、下組が勝てば大漁という（若林編1954：377～378）。

七夕の綱引きはめずらしい。いわゆる「七夕綱」というのはある。たとえば熊本県南部では以前から盛んで、今日も八代市葦北郡に残っている。しかしこれはワラ綱を集落の出入り口に吊し、外から疫病や悪霊が侵入しないように防ぐためのもので、この綱で綱引きをすることはない。

住吉神社では、二体の七夕の木像と獅子頭が重要な祭具として使われる。木像の神はおそらく七夕行事に関するので、男女の二体であろうが、よくわからない。男女神靈の加護の下で、年頭の時期ではないが、年占の意義をもっていたようである。

図 12 輪島市住吉神社 綱曳き祭図絵巻（部分）

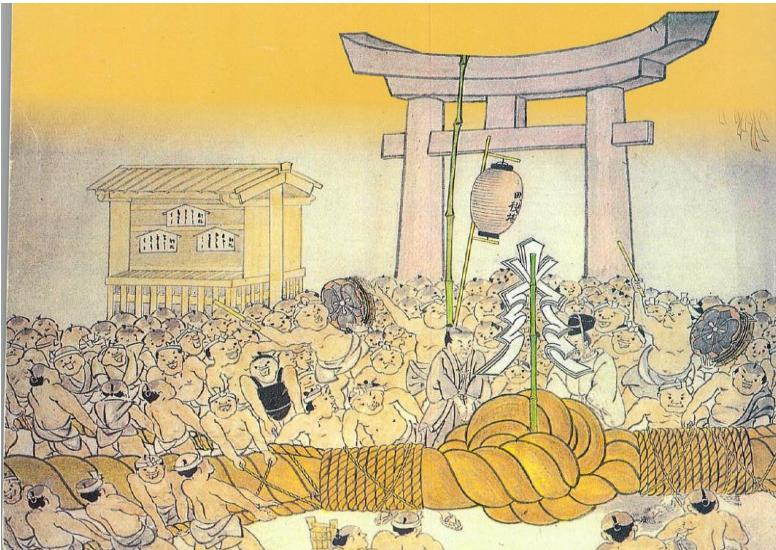


図 12 は絵巻の一部であるが、中央の結び目がこぶ状になっているので、二本綱を絡ませていることが推測できる。また誇張があるとしても大綱であったようだ。

このように大きな綱 2 本の先端の輪を結んで引き合うのは、沖縄を除いて、列島では秋田刈和野、鳥取県三朝温泉の「陣所の大綱引き」（5月4日）である（材料はワラではなく藤葛）。また今は廃れたが富山県八尾市には「大面引」といって、雌雄二本で頭を輪にして、「支木」をさし込んで結び合わせて行う綱引きがあった（松平 1977: 92）。これに輪島の事例が加われば、雌雄 2 本の大綱の結合は日本海側にのみ見られ、太平洋側にはないといえる。日本海側にだけ分布しているのは、海沿いの伝播、韓国からの伝播（韓国の綱は雌雄 2 本の巨大なものが多い）が考えられるが確証はない。

写真 18 三朝温泉「陣所の大綱引き」



現在、石川県で夏の綱引きが見られるところは、羽咋郡志賀町堀松の住吉神社で行われている「綱引祭」である。7月第3日曜（以前は7月23日。その前は6月23日であった。（石川県教育委員会編1999：10））の夜おこなわれる。輪島の綱引きに倣ったもので、江戸時代中期にはじまったといわれる。

神事がおわると神社前の道路に出て、山方と浜方に分かれ長さ40間の綱を引き合い、山方が勝てば米の値があがり、浜方が勝てば米の値が下がるといわれている（山方が勝てば豊作、浜方が勝てば豊漁となるともいう）。綱には竹の芯が入っていて、綱の編み方にも特徴がある。完成した綱は、蚊取り線香のように巻いた綱を4本の青竹で挟んで神殿に置く（写真19）。加賀地方は羽咋市唐戸山神事相撲があるように、相撲興行の盛んなところであるが、綱引祭にも子ども、大人の相撲が境内で神事の一つとして奉納されている。

写真19 堀松の綱引祭：神殿に安置された綱



写真20 堀松の綱引祭：山と浜の対抗



8. 沖縄・八重山の綱引き

沖縄は全国で最も綱引きが盛んなところで、各地にありその総数を把握するのも困難なぐらいである。なかでも今はかなり観光化しているが、毎歳 10 月体育の日に近い日曜日に行われる那覇の大綱挽きは有名である。

那覇大綱挽きの絵図については、これまで慎思九（1767～1844）の「親見世綱之図」が写真で残されているだけであったが、近年、琉球王国時代（19～20世紀）の那覇四町の綱挽きの様子を描いた絵図が発見された。作者はわかつていらない。

沖縄の綱挽きに特徴的な旗頭の行列や巨大な雌雄の大綱やカヌチボウ（二本の綱を繋ぐ頭貫棒）もみえる。旗頭のなかには今日にはないものもあり、往事の様子がわかる貴重な史料である（その価値については、真栄里 2006 を参照）。

図 13 那覇四町綱之図



石垣の豊年祭での綱引きを描いた絵図がある。

琉球王府下の政府であった八重山蔵元の絵師である宮良安宣（1862～1931）と嘉友名安信（1831～1892）らの画稿の中に豊年祭の図があり、その中で演じられる綱挽きがスケッチながら活き活きと描かれている。石垣市立八重山博物館蔵。

図 14 石垣島の豊年祭 1

下に雌雄 2 本の綱。ここには頭貫棒は描かれていないが、頭の輪を棒で結ぶ。

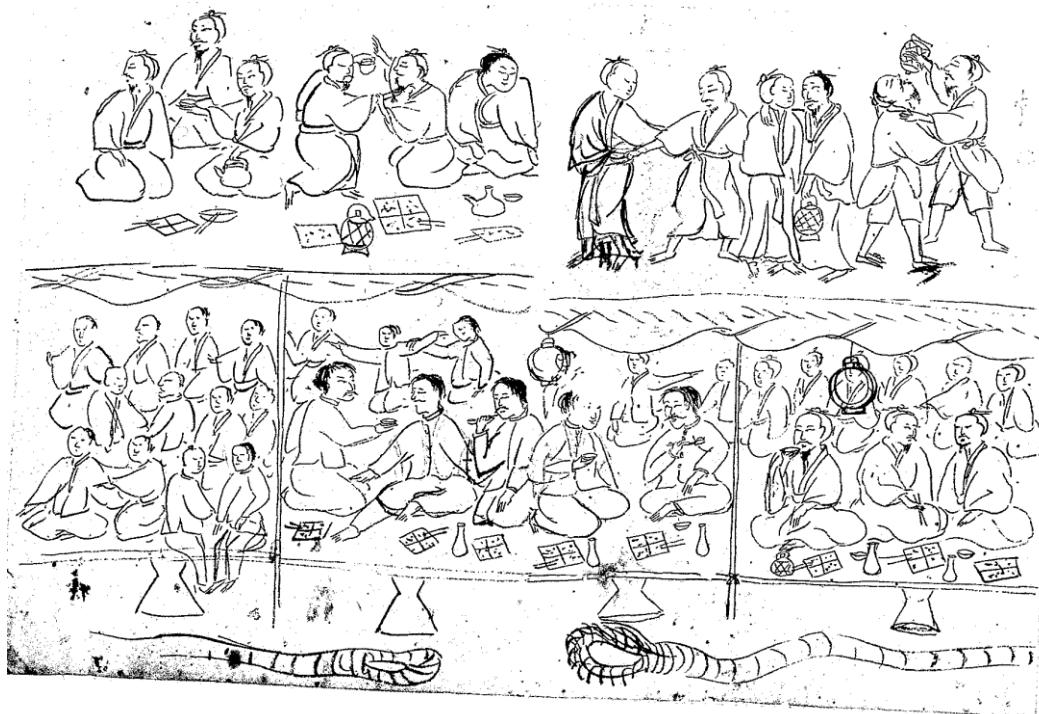


図 14 石垣島の豊年祭 2

たいまつ、綱の尾、ツナヌミン、旗頭



8月におこなわれる豊年祭は収穫を祝う行事である。筆者が見たのは 2017 年 8 月 5 日であった。スケッチには、四ヶ字の登野城、大川、石垣、新川と真栄

里、平得の旗頭が立ち並び、酒宴、棒術、日が落ちて松明を灯す中でおこなわれるツナヌミン（板の上の武士の戦い）、ガーリーなどが描かれていて今日の様子と変わらない。

写真 21 真乙姥御嶽（新川）の前に並んだ旗頭



写真 22 石垣四か村豊年祭の綱



写真 23 ツナヌミン：西側の武者は鎌をもつ。まわりに松明



9. アイヌの綱引き

最後に北海道アイヌの綱引きを描いたものを紹介しておく。橋本芳園『熊祭り絵巻』(天理大学附属天理図書館蔵) からであるが、明治 26 年 (1893) のものなので、江戸期の史料を提示するという本稿の主旨からははずれる。しかしそこに描かれている綱引きの光景は、江戸末期にはアイヌの集落で見られたものと思われる所以、参考までに掲載しておく。

図 15 アイヌ熊祭りでの綱引き 綱が切れたところ



アイヌの綱引きは熊祭の中で行われる。小熊を矢で射殺したあと、熊の引き

綱として使ったものを、熊を神の国に帰す儀礼の過程で余興としておこなう。余興には弓矢をもちいた射術や相撲などの競技があり、綱引きもそのなかに含まれる。詳細は（櫻井 2014）を参照。

おわりに

江戸期の絵画資料から各地の綱引き行事を集めて、若干の考察を加えてきた。それらを現在まで伝承されている綱引き行事と比較してみると、すでに廃れてしまつた要素、いまも存続されている要素などがわかる。また今日みられる内容がいつまで遡ることができるのか、それを実証することもできる。

以下、いくつかの点をまとめておく。

●子どもの遊戯

室町時代には都会ではすでに遊びとなっていた。そのことは文字資料からも確認できる。岡見正雄・佐竹昭広『標注 洛中洛外図屏風 上杉本』1983年は、上杉本の描かれた同時代とその前後の文献（文学作品、記録、地誌など）から絵画の内容に関連した文を紹介していて、当時の行事を文字から裏付けることができる労作である。その標注から綱引きに関するものをここに引用しておく。

児戯引綱西又東 歓声喜氣在春風

村橋暮景不堪画 人影水清新月中

再昌草十四、永正十一年正月三日

綱引きはゑいやおやある子共哉

伊勢踊 卷一

いざ子ども大どももひけ春のつな

桜川 春一

ひけやひけ物見なりげに春のつな

桜川 春一

曳つなもこゑをちからたすけ哉

桜川 春一

（以上、岡見・佐竹 1983：83）

『再昌草』作者の三条西実隆は1455～1537の生卒。永正十一年は1514年である。正月に子どもが東西にわかつて綱引きをしている。村橋というのは、綱引きの場所を意味しているのか、村の暮景として詠んだだけなのかはわからな

いが、もし綱引きの場所であれば、江戸の千住大橋の綱曳きが思い出される。境界での競技として象徴性があるのかもしれない。

これらの和歌はいずれもみな季節は春である。正月の子どもの遊びとして綱引きは普及していたのである。

農漁村になるとまた様相は違うかもしれない。農作・豊漁は悲願であるので、本来の年占の意義がかかった神事としておこなわれていたと思われる。

●時期

年始は小正月までのあいだに行っている。最後は『日次紀事』の言うように左義長のなかで焼却処分したようだ。今もそのようにするところがある。たとえば糸魚川市大字青海の東町と西町に江戸時代から続く小正月行事「竹のからかい」は、竹を用いためずらしい綱引きだが、最後は浜辺にしつらえた左義長のなかで焼いてしまう。

お盆（筑前）、七夕（輪島住吉神社）、中秋節（八月十五日）（淡路鳥飼、薩州鹿児島）の綱引きも今日多くは残っている。

●目的

「得福」（『日次紀事』、秋田籬島『摂津名所図会』）、「そのとし何事もよし」（『諸国年中行事（大日本年中行事大全）』）、「祈農桑」（『東都歳時記』）、「豊饒の吉兆」（『淡路国名所図絵』）、「暑邪の煩ひを除く」（『筑前歳時図記』）、「綱（カミヅナ）勝ぬれば秋の田の実のよからず、雌綱（シモヅナ）曳キ勝ッときは、秋の千町も八束の稻穂うち寄せて民草榮ふ」（『月の出羽路』）、八重山の豊年祭など五穀豊穣、漁獲大漁、無病息災、米価（神宮寺、堀松）などの目的は今も同じ。

●綱が切れたところで終了

筑前の盆綱など。いまも田隈などでは最後に鉈で綱を切断する。

●場所

鳥居の前：大津（神社名不明）／淡路鳥飼八幡宮／難波八坂神社／輪島住吉神社

橋：千住大橋

広場：筑前の盆綱に「村中の広き所」とあった。

●材料

ワラ以外に「萱あるいは葛かづら」（筑前）を使うのは九州ではいまも同じ。麻、竹もある。カギヒキは木（日光神社／秋田太平山）。

●頭部が輪形で雌雄二体の巨大な大綱

一本綱が多いが、秋田神宮寺／輪島住吉神社／沖縄は近世のころから二本綱

であった。絵図はないが三朝の陣所も雌雄の大綱である。

●龍蛇

大津長等神社／摂津三島郡原村天王社

●村落の対抗競技

とくに山・陸・里（農村）と浜（漁村）の対抗で農民側が勝てば豊作、漁民船夫側が勝てば大漁といわれた。淡路鳥飼綱曳／輪島住吉神社／志賀町堀松住吉神社

●相撲がともなう

淡路鳥飼綱曳。今日、相撲が綱引きとセットになっているところは多い。羽咋郡志賀町堀松住吉神社の「綱引祭」もそうであった。

●競技性があるので喧嘩に発展し、中絶になる

大津／江戸千住大橋

●日本の綱引きについて、中国明代の謝肇淛『五雜俎』の記事を参考にしている。

秋田籬島『摂津名所図会』／速水春暎斎『諸国年中行事（大日本年中行事大全）』／斎藤月岑『東都歳時記』

『東都歳時記』では『大明一統志』も引いている。江戸期に流入していた明代の書籍を参考にしていたのであろう。

●カギヒキ

文献では秋田、伊賀、鹿児島にあったことがわかり、文化3年（1806）刊行の『諸国図会 年中行事大成』にある伊賀上野の事例が一番早いので、この時代まで遡ることができる。

●山の神と綱引きの関係

カギヒキの事例から近世まで遡って考察できる。さらにそれはアイヌとの関係まで及ぶかもしれない（菅江真澄の指摘）大きな問題をふくんでいる。また伊賀では山神を山より田畠へ勧請する意（こころ）が鍵引であるというように、本来田の神というものはなくて、山から勧請した山神が一時的に田神となる、という神観念の存在を考える上で重要な史料である。

●さまざまな神と仏

山神、田神、水神（龍神）、市神、牛頭天王（スサノオノミコト）、七夕神など。

寺院では盆綱が関係するが、大津三井寺、京都東寺の事例もあった。

【注】

1. 水谷類校訂、宮尾与男注解『諸国年中行事（大日本年中行事大全）』八坂書房、1981。（生活の古典双書24）は、国立国会図書館所蔵の翻刻本。『諸国年中行事（大日本年中行事大全）』は複数の書名があるので、八坂書房本では『諸国年中行事』としている。宮尾の解説P221）。
2. 『摂津名所図会』第2巻（版本地誌大系10）、臨川書店、1996の解説 P602。
3. 『摂津名所図会大成』（浪速叢書、浪速叢書刊行會）、名著出版、1978の解題P2。
4. 速水春暁斎『諸国図会 年中行事大成』臨川書店（版本地誌大系21）2003：155。また中山1976：199参照。なおさきに引用した速水の『諸国年中行事（大日本年中行事大全）』は天保3年（1832）刊で、速水の遺稿を出版したものである。つまり大全以前に大成が刊行されていて、大全はいわば大成を大幅に増補しようとしたものである。
5. 小田の祇園祭については、民俗学事典編纂委員会編 2014：443「御靈信仰」の項を参照。
6. 川内綱引ホームページ <https://sendai-ootsuna.jimdo.com/> 参照。
7. 『諸国図会 年中行事大成』に見える伊賀上野村の鍵引と「2. 難波 八阪神社の綱引き」で引用した摂津原村蛇形綱引きの文については、名古屋大学大学院人文学研究科の古尾谷知浩教授及び池内敏教授からその読み方についてご教示をえた。ここに記して感謝申し上げます。
8. 松平斉光は『祭』平凡社（東洋文庫）、1998所収の「豊橋の鬼祭」で、この御玉引神事は綱曳きの変形ではないかといっている。p222。
9. 石川県立歴史博物館からご教示いただいた。ここに記して感謝申し上げます。

【江戸時代絵図史料出典】

秋田籬島『摂津名所図会』（版本地誌大系10）、臨川書店、1996

暁鐘成『摂津名所図会大成』（浪速叢書、浪速叢書刊行會）、船越政一郎編 1987、
名著出版

暁鐘成『淡路国名所図絵』『日本名所風俗図会』13 中国の巻所収、角川書店、
1980

暁鐘成『淡路国名所図絵』（版本地誌大系5）、臨川書店、1995

斎藤月岑『江戸名所図会』『日本名所風俗図会』4 江戸の巻II所収、角川書店、
1979。

斎藤月岑『江戸名所図会』（『新訂 江戸名所図会』全6巻）、市古夏生・鈴木

健一校訂、ちくま学芸文庫版、1997

斎藤月岑『東都歳事記』(『新訂 東都歳事記』上下)、市古夏生・鈴木健一校訂、
ちくま学芸文庫、2001

『三国名勝図会』『日本名所風俗図会』15 九州の巻所収、角川書店、1983

橋南谿『東西遊記』宗政五十緒校注、平凡社(東洋文庫)、1974

卷2が『西遊記』

『筑前歳時図記』『日本名所風俗図会』15 九州の巻所収、角川書店、1983

速水春曉齋『諸国年中行事(大日本年中行事大全)』(生活の古典叢書24) 水谷
類校訂、宮尾与男注解 1981、八坂書房

速水春曉斎『諸国図会 年中行事大成』(版本地誌大系21) 臨川書店、2003

菅江真澄『月迺遠呂智泥』

内田武志・宮本常一編 1973a『菅江真澄全集』第4巻、未来社

秋田叢書刊行会 1932『秋田叢書』別集第4(菅江真澄集第4)、秋田叢書
刊行会

菅江真澄『月の出羽路』

内田武志・宮本常一編 1973b『菅江真澄全集』第7巻、未来社

『六郡祭事記』秋田叢書刊行会 1929『秋田叢書』巻3、秋田叢書刊行会

【引用・参考文献】

石垣市立八重山博物館編 1993『八重山蔵元絵師画稿集』石垣市立八重山博物館

伊藤純 2001「難波八阪神社綱引神事(1)―関連史料と先行研究―」(『大阪の歴史
と文化財』7

煎本孝 2010『アイヌの熊祭り』雄山閣

大塚虹水 1990『滋賀の百祭』正、京都新聞社

岡見正雄・佐竹昭広 1983『標注 洛中洛外図屏風 上杉本』岩波書店

小野重朗 1997『十五夜綱引の研究』慶友社

小野重朗 1964『南九州の柴祭・打植祭の研究』出版社不明

片山嘉一郎 1932『淡路之誇』下、実業之淡路社

神岡町史編纂室編 2002『神岡町史』神岡町

喜多村信節 1830『嬉遊笑覧』『日本隨筆大成 新装版』別巻8『嬉遊笑覧』2

吉川弘文館 1979:129

黒田日出男 1996『謎解き 洛中洛外図』岩波新書

櫻井龍彦 2012a「盆綱攷—成田市赤荻の事例から」『国際開発研究フォーラム』

42号、名古屋大学大学院国際開発研究科

櫻井龍彦 2012b 「綱索上の“鬼”：日本“盂蘭盆節”中被形象化的中国目連故事」『节日研究』6輯、泰山出版社

櫻井龍彦 2014 「北海道アイヌの綱引きに関する考察—あわせて韓国の

「게줄다리기（蟹綱引き）」、中国的「大象拔河（象綱引き）」を論ず」

『アジアの雪民俗と文化国際学術大会論文集』

櫻井龍彦 2016 「日本的な山神」『中国山地民族研究集刊』2015年第2期
(総第4期)、社会科学文献出版社

櫻井龍彦 2017 「中国の「拔河」に関する史料と考察」『GSID Discussion Paper』
204号、名古屋大学大学院国際開発研究科

謝肇淛『五雜俎』中華書局本 1959

田口昌樹編 2006 『秋田の風景：菅江真澄図絵集』無明舎出版

中城正堯 2014 『江戸時代 子どもの遊び大事典』東京堂出版

中山太郎 1976 「網敷天神」『日本民俗学：神事編』大和書房

那覇四歴史博物館 2008 『那覇大綱挽と10・10空襲』展パンフレット

野間光辰編 1968 『新修京都叢書』第4巻(黒川道祐編『日次紀事』)、臨川書店

林屋辰三郎 1985 『京の四季-洛中洛外図屏風の人びと』岩波書店

真栄里泰山 2006 「新資料「那覇四町綱之図」の発見」『沖縄タイムズ』2006年
12月25日 文化16面

松平斉光 1977 『祭：本質と諸相 古代人の宇宙』朝日新聞社

松平斉光 1998 『祭』平凡社(東洋文庫)

三重県教育委員会編 1997 『三重県の祭り・行事』三重県教育委員会

三隅治雄編 2007 『全国年中行事辞典』東京堂出版

南木芳太郎 1931 「大阪に残れる正月の民俗行事」『上方』創刊号

民俗学事典編纂委員会編 2014 『民俗学事典』丸善出版

宮本常一編 1962 『日本祭礼風土記』2、慶友社

若林喜三郎編 1954 『輪島町史』輪島町役場

和歌森太郎編 1964 『淡路島の民俗』吉川弘文館

【絵図の出典】

図1 洛中洛外図屏風のなかの綱引き

<http://izucul.cocolog-nifty.com/balance/2013/10/post-55a3.html>

図2 名古屋城本丸御殿対面所障壁画のなかの綱引き

<https://www.aichi-now.jp/stories/detail/5/>

図 3 綱引き部分の拡大図

<https://plaza.rakuten.co.jp/hitoshisan/diary/201612250000/>

図 4 絵本のなかの子ども綱引き

上：万亭応賀『幼稚遊昔雛形』下：西川祐信『絵本大和童』とともに
中城正堯 2014 : 134

図 5 大津 正月 14, 15 日の綱引き

水谷、宮尾 1981 : 44-46

図 6 難波村 牛頭天王綱引

『摂津名所図会』第 1 卷 臨川書店 1996 : 292-293

図 7 千住大橋綱曳

『東都歳時記』卷 2。『新訂 東都歳事記』上、ちくま学芸文庫、2001 :
237-238

図 8 鳥飼綱曳

曉鐘成『淡路国名所図絵』臨川書店、1995 : 538-539

図 9 薩州鹿児島の八月十五日の綱引

橘南谿『西遊記』（『東西遊記』宗政五十緒校注 1974 卷 2 : 184-185）

図 10 筑前 村々綱曳

『筑前祭事図記』7 月 15 日

九州大学総合研究博物館デジタルアーカイブ

図 11 神宮寺の綱引き

『月の出羽路』仙北郡五。田口昌樹編 2006 : 87

図 12 輪島市住吉神社 綱曳き祭図絵巻（部分）

『季刊自然と文化』42、日本ナショナルトラスト、1993 の表紙

図 13 那覇四町綱之図

那覇四歴史博物館 2008 : 6

図 14 石垣島の豊年祭 1, 2

石垣市立八重山博物館編 1993 : 60, 63

図 15 アイヌ熊祭りでの綱引き 綱が切れたところ

橋本芳園『熊祭り絵巻』、煎本孝 2010 : 174

【写真の出典】

写真 1 坂本 御田神社：とぐろを巻く綱 2012 年

https://blogs.yahoo.co.jp/jokyosyojo/GALLERY/show_image.html?id=14692565&no=11

写真 2 長等神社綱打祭

2014年1月14日 筆者撮影

写真 3 拝殿から楼門の方へのびた蛇体

2014年1月14日 筆者撮影

写真 4 難波八坂神社の鳥居

2014年1月19日 筆者撮影

写真 5 右の通行人がもつ御幣。綱につけた御幣も同じ。綱の町内練り歩きの様子。

2014年1月19日 筆者撮影

写真 6 綱中央の結び目の突起

2014年1月19日 筆者撮影

写真 7 オロチの八頭

2014年1月19日 筆者撮影

写真 8 兵庫県洲本市五色町鳥飼八幡神社の大綱引き

2012年10月21日 筆者撮影

写真 9 西浦のかずら引き

2012年8月16日 筆者撮影

写真 10 田隈の綱切り

2012年8月15日 筆者撮影

写真 11 久富盆綱曳き

2012年8月14日 筆者撮影

写真 12 津市美里町高座原のかぎひき

2014年1月5日 筆者撮影

写真 13 伊賀市川北のかぎひき

2014年1月6日 筆者撮影

写真 14 津市稻葉町上稻葉愛宕神社 カギ

2014年1月5日 筆者撮影

写真 15 逆樹

秋田叢書刊行会 1932『秋田叢書』別集第4（菅江真澄集第4）：208, 209

写真 16 豊橋市安久美神戸神社鬼祭の御玉引神事

2018年2月11日 筆者撮影

写真 17 市神様と大俵 会津坂下町

2018年1月14日 筆者撮影

写真 18 三朝温泉「陣所の大綱引き」

2013年5月3日 筆者撮影

写真19 堀松の綱引祭：神殿に安置された綱

2012年7月15日 筆者撮影

写真20 堀松の綱引祭：山と浜の対抗

2012年7月15日 筆者撮影

写真21 真乙姥御嶽（新川）の前に並んだ旗頭

2017年8月5日 筆者撮影

写真22 石垣四か村豊年祭の綱

2017年8月5日 筆者撮影

写真23 ツナヌミン：西側の武者は鎌をもつ まわりに松明

2017年8月5日 筆者撮影

付記

本稿は科研費助成事業「地域開発からみた日本の伝統的運動文化の現代的意義と新たな価値創造の探究」山田理恵代表 課題番号 26350724 の研究成果の一部である。